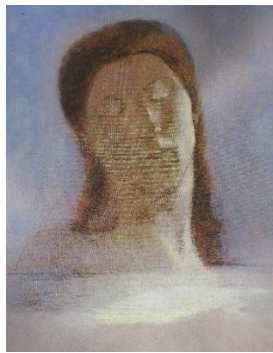


眠り展：アートと生きること ゴヤ、ルーベンスから塩田千春まで

東京国立近代美術館（竹橋） 2020. 11. 25～2021. 02. 23

「眠り」は、人々にとって生きていく上で欠かせないだけでなく、芸術家たちの創造を駆り立ててきた。本展は、当館が所蔵する絵画、版画、素描、写真、立体、映像など、幅広いジャンルの古今東西のアーティスト 33 人「約 120 点」の作品によって、多彩な「眠り」の表現の絵画を紹介している。



フランシスコ・デ・ゴヤ 《ロス・カプリーチョス》 1797年頃 エッチング

怪奇な面々に驚かせながら眠っているエッチング作品は、空想的で石の表面に書かれた「カプリーチョス」という語は、きわめて個人的な幻想を連想させて、誰もまともに取り上げないような気まぐれを意味しているとされている。

オディロン・ルドン 《目を閉じて(閉じられた目)》 1890年 油彩/画布

フランス象徴主義の大画伯の「黒の時代」から「色彩の世界」への転換点となった重要な作品で、モチーフは、上空の青空の表現に水面らしき水平の彼方で目を閉じた巨大な女性の閉じられた目が、穏やかで安らぎに満ちた表情を見せ、温かさを感じさせて豊潤で幻想的な色彩が十分溢れている。

独特のスフマート（ぼかし技法）により、薄暗い水面に眼を閉じたまま、顔と少し右肩をのぞかせた暗示性のある女性像を描いた画伯の代表作である。

この小さな作品は、空間画面が花たちの流れが作る鮮やかな色彩の渦で、その奥で耳を澄ます簡素な色彩が奏でる音色のハーモニーを聞くことができる。

ペーテル・パウル・ルーベンス 《眠る二人の子供》 1612～13年頃 油彩/板

画伯は、17世紀フランドル美術を代表するだけでなく、バロック絵画を最もよく具現した大芸術家で、本作品はあどけない寝顔を見せる二人の子供は習作として描かれたと考えられる。しかし、写生に基づく描写は、闊達な筆の運びや、二人の子供の頬に見られる豊かな肉付けがあり、透明色と不透明色との巧みな使い分け、明暗の色調の差や絵具の厚みの差などによって、対象を見事に描出する生彩ある写実法がよく発揮されている。